

「おうちに帰りたい」



介護認知症の着段普

「どうして帰れないの。

おうちに帰りたい」。涙をこぼす勝俣さん（仮名・八十代女性）は、肺炎で入院して半年以上がたつていました。脚が悪く認知症もあり、一人暮らしの自宅では転倒や失禁、お風呂で溺れかけて救急搬送されたことも。近所に住むご家族は、退院を強く望みながらも不安を抱いていました。

確かに自宅生活の再開には、事故や持病の服薬管理など、さまざまなリスクが想定されました。中でも心配だったのが、勝俣さんが「孤独」に耐えられるかどうかのこと。事故の体験や長期入院などで、誰かがそばにいないと強い不安を持つようになっていたのです。しかし、お見舞いに行ったら私に勝俣さんは言いました。「お前は工場をやっていて従業員も大勢いたの。でも戦争で工場が空襲に遭って、今のおうちに引っ越したの」。そして「お父さんは私をかわいがってくれたの。大好きだったお父さんと過ごした、あのおうちが心配」とも。

そこで本人の希望と家族の思い、ユアハウスの支援

思いが引き出す可能性

体制を病院と話し合った結果、自宅へ戻ることが決まりました。まずは準備のためユアハウスでの連泊からスタート。お茶を入れに台所へ歩く、料理に関わる、外出するなど、生活の中で活動量を増やして身体機能の向上を図りました。

並行して自宅に慣れるため、日中にスタッフと一緒に帰宅。勝俣さんは「ああ久しぶりに、おうちに帰ったわ。これがお父さんとお母さんの写真」と手を合わせました。また転倒予防のため、据え置きの手すりやポータブルトイレを設置。

緊急時に電話をかけられるよう番号を壁に貼ったり、自分で水分をとれるよう台所を整えたりしました。

一方、ご家族は勝俣さんと自宅で夕飯を食べたり、寂しくないように泊まってあげたりと、一人暮らしに慣れていくための協力を惜しみませんでした。

退院から約一カ月たち、勝俣さんが一人で自宅で過ごす日。夜に私が訪問すると「お兄ちゃん、私一人で

心細いの」と不安を吐露しました。乗り越えるべき最後の課題でした。

「勝俣さんは、おうちに戻ってきたかったですよね」と私。勝俣さんは「そう、ここが私のおうちだもん。長女だから最後まで家を守らないと、お父さんにしかられちゃう」。

そこで私が、写真に手を合わせて「お父さん、勝俣さんを見守ってください」と言うのと、勝俣さんも「お父さん、私を守って」と手を合わせました。私は次の日も来ると約束し、勝俣さん宅を後にしました。

翌朝、訪問した私に勝俣さんは「あら、お兄ちゃん久しぶりね。しばらく見なかつたけど元気？」と笑顔で言いました。

認知症があっても、家族の協力と支援体制が整えば自宅暮らし続けられる。そして家で暮らしたいという本人の思いこそが、その可能性を最大限に引き出す力だと、勝俣さんは教えてくれたのです。

そして「このミカン食べますか？」と、お父さんへのお供え物を私に差し出しました。（金山峰之介 介護福祉士・三十三歳）

◇

小規模多機能型
居宅介護事業所
「ユアハウス弥生」
（東京都文京区）のスタッフが、介護の実践を報告する。

次回は四月二十六日掲載



自宅の生活環境を確かめる勝俣さん